強まる女児選好とその背景
――第 3 子への挑戦から見る日本の性役割――

○国立社会保障・人口問題研究所　岩澤美帆
国立社会保障・人口問題研究所　守泉理恵

1　目的

この報告の目的は，日本の性役割（意識）の変化を親が子どもに希望する性別の変化を通して明らかにすることである．親の出生に対する希望には，何人ほしいかという数の側面と男の子がほしい，女の子がほしいといった性別に関わる側面がある．多くの社会で男児をより強く望む男児選好やその逆の女児選好などが観察されているが，社会におけるジェンダー平等が進めば，性別に関する選好は弱まるのではないかという仮説がかねてより提唱されていた(Pollard and Morgan 2002)．しかし実際にはジェンダー平等な社会でも男児，女児を区別する選好が観察され，その社会における新たな性役割の特徴を反映していると言われる．日本は先進国の中では比較的性役割が強固であることが指摘されているが，親の性別選好の変遷や現状からそれを特徴づけることができるかもしれない．

2　方法

本研究では，性別選好が表れやすい第 3 子出生確率に着目する．データとしては国立社会保障・人口問題研究所の「出生動向基本調査」の出生歴を用いて年次別のパリティ拡大率を計算し，男女児を持つ夫婦に比べて，女児 2 人の親の出生確率の相対的高さを男児選好，その逆を女児選好とみなし，20 世紀半ば以降の動向を確認した．また，どのような親の特徴がそうした性別選好と関係づけられるかを，離散期間ハザードモデルを用いて検証した．とくに夫の職業（自営かどうか），夫妻のきょうだい構成，妻のジェンダー意識との関連に着目する．

3　結果

分析の結果，女児 2 人を持つ親の第 3 子出生確率は 1930 年代以降一貫して男女児を持つ親よりも高いが，とくに 50 年代，60 年代の出生力低下期に高かったことがわかった．一方，男児を 2 人持つ親の第 3 子出生確率は 1970 年代前半までは，男女児の親に比べ一貫して高いという傾向は見られないが，1970 年代後半以降は上昇し，1980 年代以降は女児 2 人の親の出生確率をも上回るようになっている．こうした結果は，1980 年代以降に各種調査で指摘された日本における女児選好の優勢と整合的である．また，男児選好は夫が自営，夫が長男といった条件が強く結びついているのに対し，女児選好には妻に姉妹がいないこと，妻が非伝統的なジェンダー意識を持っていることなどが結びついていた．

4　結論

以上から，現在においても息子は家系をつなぐ「あととり」として期待されていることがわかる．一方娘は女性親族の代替という新たな役割が期待されるようになってきたのかもしれない．また妻が性役割に否定的な夫婦ほど娘の存在を希求するという結果は，こうした妻ほど娘との関係を通じて「自己拡大」を期待しているとも解釈できるが，多子を持つ選択的集団であることを考慮する必要もあるであろう．

文献

Pollard, Michael S. and S. Philip Morgan, 2002, "Emerging parental gender indifference? Sex composition of children and the third birth." American Sociological Review 67: 600-613.